

人物 シテ（神鳴）  
アド（醫師）

- (一) 彌子頭巾、縞縵斗目、狂言袴、十徳、腰帶、小刀。  
(二) 諸の名稱。三句から成り、登場の最初に読ふ。  
(三) 藥劑。  
(四) 僞醫者。  
(五) ヘンルウダ科の落葉喬木。樹幹の黄色い内皮を藥用に供する。  
(六) 生計。經濟。  
(七) 思ふやうにならぬ事。乏しい事。  
(八) よその國へ出稼ぎに行く事。  
(九) 以下舞臺を廻り、道中の心。  
(一〇) 醫藥の官。運歩色葉集「典藥テンヤク唐名大醫」  
(一一) すぐれた人。御歴歷。  
(一二) 卑下する意を示す。風情。  
(一三) 兵庫縣の加古川から東、明石川から南の廣い野の稱。  
(一四) 驚き呆れた時に言ふ語。  
(一五) 面白く無い。不愉快な。  
(一六) 雷、赤頭、着附・厚板、

神 鳴

アド（次男）「藥種も持たぬ似而非藥師く、黄葉や頼みなるらん。」これは洛中に住まひ致す敷醫者でござる。某いろくど方方を療治を致せども、手前不如意にござる程に、他國を致いて見ようと存じて罷り出た。まづそろりと參らう。まことにかやうに天下泰平の御代なれば、御典藥衆のかれのこれのと申して、歴歷のお醫者衆が敷多ござるによつて、われら體の敷ならぬ者は、他國致いて療治を仕らうより外はござない。いや何かと申す中に、廣い野へ參つたが、何と言ふところぢや知らぬ。やあく何と言ふぞ。播磨の印南野ぢや。まことにこれは内内聞き及うだ野でござる。いや俄かに曇つて來たは。さてもくすさまじい氣色になつた。これはいかな事、雨が降るは。さてもくく苦しき事ぢや。さればこそ神鳴が鳴るは。雨宿りを致したいが何とせうぞ。  
シテ（六）ひつかりくく。アド（七）なう恐ろしやのく。桑原桑原桑原。シテ（八）あ痛くく。なう痛やのく。あ痛くく。さてもくくしたたかに腰の骨を打

金襴括り袴、脚絆、法被、腰帶。ち折つた。天上を致したいが、これでは天上がならぬ。この邊りに木が一本も無い。いやこれに何者やらかがうである。やい、そこにゐるは何者ぢや。

(七) 稻妻の形容。

(八) 靱鼓を打つて一遍廻り、舞臺正面中央で飛び上り、足を組んで坐る。

(九) 屈んでゐるアドを見つけ。

人間でござりまする。シテ人間に取つても、まづいかやうな者ぢや。アド私は敷醫者でござるが他國を致しまするによつて、この野を通り合はせてござれば、殊の外すさまじう神鳴の鳴らせらるるによつて、餘り恐ろしさのまま、これにかがうで居りまする。シテ何ぢや敷醫者ぢや。アドなか。

シテ某は神鳴ぢやが、何としてやら取りはづしてこのところへ落ちて、したたかに腰の

(三) じり／＼と動く。

骨を打ち折つて、にじる事もならぬ程に、何卒療治をしてください。アドはあ。

(三) 對稱の代名詞から轉じた罵詈(三)しまふ。

畏まつてはござれども、雷電の療治は迷惑にござりまする程に、この儀は御許されて下されませい。シテおのれ療治をせぬにおいては、掴み殺して退けう。

アドああ、それならば療治を仕りませう。眞平命を助けて下されませい。シテ

さあ、それならば療治をしてください。アドそれならばまづちとお脈を伺ひませう。

シテ脈を見てください。これは何とするぞ。アドようござりまする。

(四) 恐る恐る抜き足で近寄り、右袖をまくり手をのばして、シテの頸を抑へる。シテは躍り上る。

そうじて下界の人間は左右の手にござるによつて、心・肝・腎・肺・脾・命門を考へまするが、こなたは天上のお方でござるによつて、頭脈と申して頭で脈

(二) 對稱の代名詞。あなた。

を伺ふ事でござる。シテこれは尤もぢやよ。アドさてこなたには落ちさせられ

(三) 氣配。氣味。

たが尤もでござる。御持病に中風がござるが、それ故落ちさせられたものでござらう。シテ汝はよう脈を取り覺えた。殊の外上手ぢや。某は不斷中風氣なよ。

アドさやうに見えまする。シテそれならば急いで療治をしてください。アド畏ま

つてござる。さりながらここは野中でござれば、藥を煎じませう手だてがござ

らぬ。又某は鍼をも致しまするが、かやうの早業には針程の事はござりませぬ程に、鍼を打ちませう。シテそれはともかくもぢや。早う天上するやうにして

くれい。アド心得ましてござる。かつし。シテあ痛。なう痛やの

。あ痛。アド雷電のそのやうな比興な事がござらうか。ちと痛い

分は堪忍なされませい。かつし。ずう。何とでござる。シテはあ今の

で少しよいやうな。アドそれならば今度は横針を致しますせう。シテよからう。

さりながら痛まぬやうに打つてくれい。アド少しの間でござる。御堪忍をなさ

れませい。かつし。シテあ痛。なう痛やの。あ痛。

。アド申し鍼が曲りまする。ちとこらへさせられい。ずう。何とでござる。

シテ餘程快うなつた。アドそれならば今度は、お腰へ打ちまする。シテさりな

がら靜かに打つてくれい。アドちと御堪忍なされませい。かつし〜。シテ  
あ痛〜。なう痛やの〜。あ痛〜。アドかつし〜。ずう。何と  
でござる。シテ最早<sup>三三</sup>すきと快うなつた。アドそれは目出たう存じまする。シテ

(三)即座に。  
(三)際。場合。

(四)大きな喜び。

(五)動作者の意志を現す助動詞  
「むず」の轉。  
(六)ひでりによる災害。  
(七)水害。

そちは殊の外上手ぢや。某の傍輩どもにも、中風な者があるによつて、汝にか  
けたい事ぢやよ。アド私のかかつて一療治致さば、そのまま癒りませうものを。  
シテさて樂代をやりたいが、このみぎりぢやによつて何もないが、何とせう  
ぞ。アドそれは忝けなうござるが、こなたの達者に癒らせられたこそ、目出た  
う大慶<sup>三四</sup>に存じまする。別にお禮には及びませぬ。シテさりながら何ぞやりたい  
ものぢやが。いやこの撥<sup>ばち</sup>を取らせう。アドいや、その撥は私の方では用に立ち  
ませぬ程に、要らぬものでござる。シテそれなれば何をやらうぞ。この太鼓を  
取らせう。アドその太鼓を買ひましても、かへつて迷惑にござる。シテさり  
ながら何ぞ禮をしたいものぢやが、何とせうぞ。さらば何ぞ望みがあらば言  
へ。叶へてやらう。アドそれならば申しませう。私は田舎を歩きまして渡世を  
送りまする者でござる程に、日の照つてよい時分には、日を照らさせられて下  
されうず。又雨の降つてよい時分には、雨を降らせられて、干損<sup>かんそん</sup>水損<sup>すいそん</sup>も無う

(三)甚しい。大層な。

(三)一層。  
(四)藥師瑠璃光如來の略。衆生の  
病患を救ふ醫王。  
(四)變化して世に現れた者。  
(四)典藥の上席者。紅梅千句「こ  
しらへてもつ典藥のかみ」

五穀成就致すやうに、守らせられて下されうならば、有難う存じまする。シテ  
それは安い事ぢや。さりながらいか程守らうぞ。アド三千年守らせられて下さ  
れませい。シテいや〜三千年と言ふは夥<sup>おびただ</sup>しい事ぢや程に、三年守らう。アド  
この界の三とせは、餘り僅かの間でござる程に、それならば千年守らせられて  
下されませい。シテいや〜千年もまだ多い。さらば八百年守らうぞ。アドそ  
れは忝けなう存じまする。さらば八百年守らせられて下されい。シテこの上は  
干損水損も無う五穀成就し、汝が行末富貴延命に榮ふるやうに守らうぞ。アド  
それは一入<sup>ひとしほ</sup>有難う存じまする。シテ最早天上するぞ。アドお名残惜しうござる。  
シテ「降つつ照らいつ、」地降つつ照らいつ八百年がその間、干損水損もあるま  
じい。御身は藥師<sup>りやくし</sup>の化現<sup>りげん</sup>かや。中風を直す藥師を、典藥<sup>てんやく</sup>の頭<sup>かみ</sup>と言ひ捨てて、又  
神鳴は上りけり。」シテひつかり〜。アド桑原桑原桑原。